

# 平成27年度 第4回足立区総合教育会議 議事録

|               |                                                             |    |                       |    |
|---------------|-------------------------------------------------------------|----|-----------------------|----|
| 会 議 名         | 平成27年度 第4回足立区総合教育会議                                         |    |                       |    |
| 開催年月日         | 平成27年9月2日（木）                                                |    |                       |    |
| 開催場所          | 足立区役所8階 特別会議室                                               |    |                       |    |
| 開催時間          | 午後3時開会                                                      |    |                       |    |
| 構 成 員<br>及び出欠 | 区長 近藤 やよい                                                   | 出席 | 教育長 定野 司              | 出席 |
|               | 教育委員(教育長職務代理)<br>小川 正人                                      | 出席 | 教育委員 桑原 勉             | 出席 |
|               | 教育委員 花岡 恵三                                                  | 出席 | 教育委員 小川 清美            | 出席 |
| 関係職員          | 政策経営部長 長谷川 勝美                                               |    | 総務部長 大山 日出夫           |    |
|               | 地域のちから推進部長<br>井元 浩平                                         |    | 産業経済部長 石居 聡           |    |
|               | 福祉部長 橋本 弘                                                   |    | 衛生部長 大高 秀明            |    |
|               | 教育次長 山本 聖志                                                  |    | 学校教育部長 宮本 博之          |    |
|               | 子ども家庭部長 伊藤 良久                                               |    | 生涯学習振興公社事務局長<br>永井 章子 |    |
|               | 政策経営課長 中村 明慶                                                |    | 総務課長 鳥山 高章            |    |
|               | 秘書課長 高橋 俊哉                                                  |    | 地域文化課長 浅見 信昭          |    |
|               | 教育政策課長 杉岡 淳子                                                |    | 教育指導室長 浮津 健史          |    |
| 事 務 局         | 政策経営部 政策経営課<br>経営戦略担当 佐藤 雅憲<br>経営戦略担当 甲斐 貴大                 |    |                       |    |
|               | 学校教育部 教育政策課<br>教育政策担当 楠山 慶之                                 |    |                       |    |
| 会議に付した<br>議題  | 1 教育大綱（案）策定に向けた青少年期における各団体等の活動について<br>2 情報連絡<br>教科書採択結果について |    |                       |    |

## 第4回足立区総合教育会議

日 時 平成27年9月2日(木) 午後3時開会  
場 所 足立区役所8階 特別会議室

○中村政策経営課長

それでは、平成27年度第4回足立区総合教育会議を始めさせていただきます。

まず、議事の進行に先立ちまして、本会議の主催者でございます足立区長よりご挨拶申し上げます。

○近藤区長

お忙しい中、まことにありがとうございます。

本日でございますけれども、とりあえず大綱の柱立てができてまいりました。これからの教育の基本的な大綱の考え方につきまして、関係団体の方々にご意見をいただく場を設定させていただきました。まだまだあらあらでございますので、皆様からのご意見をいただいて、これからさらに練り上げてまいりたいと思います。忌憚のないご意見、ご要望、お考えをお聞かせ願いますようよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

○中村政策経営課長

それでは私から、最初に、会議の運営等についてご説明をさせていただきます。

申し遅れましたが、本日、司会を務めさせていただきます政策経営課長の中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本会議でございますが、公開を原則としてございます。会議録はホームページ等で公開をさせていただきます。そのため、会議録作成のために、皆様のご発言を録音させていただきますので、ご了承くださいたいと思います。

続きまして、席上に配付させていただいております資料の確認と説明をさせていただきます。

まず、一番上にございますのが、A4、1枚の本日の次第でございます。

続きまして、総合教育会議の構成メンバー、また、関係職員の出席名簿と、関係団体出席者の方の名簿、それぞれA4、1枚ずつでございます。また、座席表も1部添付させていただいてございます。

資料1、A3、片側がつづら折りになっております足立区教育大綱（案）と書いてある資料がございます。簡単にこの資料の中身の説明をさせていただきますと、足立区教育大綱につきましては、これまで3回の会議の中で、案を作成してまいりました。左上の四角いところに書いてあります「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」という基本理念を掲げながら、教育大綱づくりを進めているところでございます。

左側の文章については、教育大綱をつくる上での考え方を示したものでございまして、「教育大綱とは」ですとか、「教育の使命」などを記載させていただいております。

足立区の教育大綱で非常に特徴となるのが、見出しの2つ目に「貧困の連鎖を断ち切る教育」とございますけれども、足立区では今年度から子どもの貧困対策に取り組んでおり、貧困の連鎖を断ち切るための一番重要な施策として教育があるということで、この説明の中に記載をさせていただいております。

また、この大きな基本理念を実現するために、ライフステージと呼ばせていただいておりますが、右側に、人生におけます3つの時期、乳幼児期、青少年期、成人期という3つのライフステージを設け、それぞれの理念をつくらせていただいております。本日、ご意見を賜りたいと思っておりますのが、この中でも、真ん中にございます青少年期でございます。そこに世代別の理念として、「ともに歩み、磨きあいながら、自身の道を切り拓く力を培う」という理念を掲げさせていただいており、これを定めた理由などの記載ございます。こういったところを今日ご出席の皆様からぜひご意見を賜りたいと考えてございます。

次に、資料2でございますが、A4、1枚、縦のもので、今、資料1でお示しました教育大綱の理念を実現するための施策の案でございます。これも3つのライフステージごとに、細かな施策ではなく、それを束ねる柱立てのような施策を記載させていただいております。本日は、このうち、特に青少年期に掲げております6つの柱立てについてもぜひご意見を賜ればと考えてございます。

資料3が、総合教育会議の事務日程でございます。

資料4が、前回、第3回の総合教育会議の議事録をご用意させていただいております。

また、席上に、本日の2番目の案件の資料も配付させていただいております。

## 1. 教育大綱（案）策定に向けた青少年期における各団体の活動等について

### ○中村政策経営課長

それでは、議事を進めさせていただきます。

まず、議事に入ります前に、総合教育会議のメンバーと、本日ご出席いただいております各団体の代表者の皆様を私からご紹介させていただきたいと思えます。お手数ですが、その場でご起立いただければ、ありがたく存じます。

まず、近藤やよい足立区長です。

### ○近藤区長

ありがとうございます。

### ○中村政策経営課長

続きまして、定野司教育長です。

### ○定野教育長

定野です。よろしくお願いします。

### ○中村政策経営課長

小川正人教育委員です。

### ○小川（正）委員

小川です。よろしくお願いします。

### ○中村政策経営課長

桑原勉教育委員です。

○桑原委員

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

花岡恵三教育委員です。

○花岡委員

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

小川清美教育委員は、本日欠席でございます。

続きまして、団体の代表者の皆様を読み上げさせていただきますので、ご挨拶をよろしくお願いいたします。

足立区立小学校長会会長、網田俊二様。

○網田会長

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

足立区立小学校PTA連合会会長、鈴木淳様です。

○鈴木会長

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

足立区立中学校長会会長、保坂朗様です。

○保坂会長

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

足立区立中学校PTA連合会会長、井門明洋様です。

○井門会長

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

東京都立江北高等学校校長、竹原勝博様です。

○竹原校長

よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

足立区少年団体連合協議会会長、野辺陽子様です。

○野辺会長

野辺でございます。よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

足立区青少年対策地区委員会会長連絡協議会会長、赤間信一様です。

○赤間会長

赤間でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

一般社団法人足立区医師会理事、奥田隆博様です。

○奥田理事

奥田でございます。よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

公益社団法人東京都足立区歯科医師会会長、湊耕一様です。

○湊会長

湊でございます。よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

NPO法人青少年自立援助センター常務理事、河野久忠様です。

○河野常務理事

河野です。よろしくお願いいたします。

○中村政策経営課長

続きまして、ご紹介させていただきました皆様に、それぞれの団体の取り組みですとか、先ほどの教育大綱についてのご意見などをいただければと存じております。

最初に、東京都立江北高等学校校長の竹原様、よろしくお願いいたします。

○竹原校長

こんにちは。私の息子も娘も足立区の教育を受けて大きくなりました。私自身も足立区の高等学校、4校に勤務しております。それから、江戸川区の中学校の校長も務めさせていただきまして、いろいろと子どもたちの状況というのは理解しているかなと思います。

常常思いますのが、あんなにかわいかった子が高校に来るまでにどうしてこんなに変わっていくのかなといったところがここの趣旨かなと考えております。やはり大人の責任というのはありますけれども、私たち学校の責任ということもいろいろと考えています。1つは、自己肯定感という言葉がよく出てきますけれども、子どもたちが本当に将来に希望を持てる社会であるのかなと。例えば完全失業率や非正規雇用率の高さ、それから、無業者や早期離職者といった方々がいらっしゃる。そういった環境を見ながら育っていくと、私たちの将来はどうなるのだろうと。将来に夢と希望を持てる、そういった自分のライフステージを描けるのかなといったところが大きなところかと思っております。

それから、精神面でいきますと、子どもたちに足りないところといいますのは、皆さんご存じのように、耐性ですよね。それから、協調性、粘り強さ、あと、人との関わり方、コミュニケーションとよく言われますけれども、そういったことは、結局、生活体験からくるのかなとは考えておりま

す。

言葉の部分で言いますと、最近、死語と私は捉えているのですけれども、叱咤激励というところ  
です。叱咤の段階で終わってしまっている。その後の激励までは読み込めない。大人の世界でも、ど  
うして怒るのだ、で終わってしまう。その先が読めていない。なぜそういうことが言われているの  
かといった期待値なんかも伝えていくのがなかなか難しい。そういった社会の変化に伴って、教育  
界もいろいろと改革に着手しているのですけれども、それが本当に子どもたちのためになっている  
のか。社会がこれだけ変わっていく中で、あまり変わっていないのは教育界かなということです。  
そういうふうに捉えています。ですから、将来への不安等を払拭しながら、学習意欲、何のために学  
ぶのかといったところです。

それから、個性を重視と言われますけれども、本当に1人1人の個性を重視しているのか。よさ  
を伸ばす時間があるのかといったところもあります。ゆとり教育ということはよく言われてきて、  
そういう中で、子どもたちが中学校までの教育を終えて、高等学校へ向かうときの進路選択の中で、  
就労ということがよく言われており、そういったことも重要なと考えています。東京都教育委員  
会が8月18日に出して、ホームページに載っていますけれども、「中学校における進路指導の在り  
方」、これも高等学校が受けてやっていくのですけれども、その中にもよく書いてあります、これは  
中学校がどうのこうのではなくて、高等学校との連携、小中高の連携といった柱をいかにしていく  
のか。机上の空論ではなくて、本当に現実的なところで話し合いを持って、一歩お互いが踏み込ん  
で、この子どもたちのためにといったところを実践していかななくてはいけないかなと考えております。

#### ○近藤区長

ご意見ありがとうございます。その中で、この部分がたたき台の中には欠けているのではないか、  
これはやはりどうしても入れ込むべきではないかというような指摘の部分はございませんか。例  
えば非常に印象的だったのは、現在の社会が本当に将来に希望を持てる社会であるのかどうか。つ  
まり、今回のたたきの素案は、どちらかといえば、そういう社会であるということを前提にして書  
かれているというスタンスではないかと思うわけですが、その前提が揺らぐということにな  
ってくると、その辺のところの危うさが出てくる可能性もあると思うのです。ですから、前提の将  
来の日本の社会というものをどうやって考えていくのかということが今1つの投げかけであったの  
かなと思ったのと、小中高の連携は、絵に描いた餅ではなく、具体的な、本当に密接な連携が必要だ  
といったことについては、1つ抜けているのかなと感じさせていただいたのですけれども、それも  
含めて、ここが抜けている、少しスタンスがおかしいのではないかというようなことが何かあれば、  
つけ加えられることはございませんでしょうか。

#### ○竹原校長

将来に希望が持てる、持てないというのは、約3割の生徒は持てていないのではないかと捉えて  
いるのです。あとの7割の子たちは、自分から開拓していくという気持ちを持っています。ただ、そ  
ういったことはもっと根深いところにありますので、こういう言い方をすると悪いですが、

生徒はいろいろな層があると思うのです。その中で、その層に応じたさまざまな情報提供をしていかなきゃいけない。自分で開拓できる子は自分でいいですけども、できない子たちにはどういう手だてをしていくのか、そして、希望を持たせるといったところです。要するに、主役にならせる、将来、自分が主役になれるのだよといったところです。

○近藤区長

その人なりの主役になれるということですね。

○竹原校長

そうです。

○近藤区長

ありがとうございます。重要なお提案だと思います。

○中村政策経営課長

それでは次に、足立区立小学校長会の網田様、ご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○網田会長

この会議に参加するに当たりまして、事前に教育大綱（案）をお送りいただきまして、そして、青少年期について目を通していただく中で、小中高とある中で小学校の役割を考えたときに、ここに「夢や希望の実現に向けて」とあるのですけれども、これは小中高の校種の違いもあるのでしょうけれども、今の子どもたちがそうした夢とか希望をどれだけ持っているのかということも大きいかと思っています。例えばキャリア教育の一環で、5、6年生の授業等を見ても、将来どんなことをやってみたいかとか、どんな仕事をしてみたいかというときには、あまり自分なりにそうした夢を持っていないという子が多いです。ただ女子児童の場合には、発達段階の違いもありますけれども、こういうことをやってみたいというのを持っている度合いが高いかと思うのです。そうした夢や希望について、学校だけでなく、ここにあるように、家庭、あるいは地域等で啓発的な場といいますか、経験等も含めて必要なのかなと思っています。学校に来て、子どもが友達とコミュニケーションをとるといえるのは多いのですけれども、家に帰ると、ゲームをやったり、テレビを見たり、人と人とのコミュニケーションを図る場が少ないのかなという気はいたします。

もちろん小中高と上がるに従って学習内容等も難しくなっているのですが、小学校の役割の1つとして、基礎学力を確実に定着させていくという取り組みを各学校でもやっていますし、こちらのデータを見せていただく前に、就学援助認定率と学力の相関ということでデータが出ていますけれども、中学校とまた違うところがあるのですが、やはりその程度が少ないというデータなわけです。やはり補習しないと、その日の学習が確実に身につけていないという子どもに対して、各学校では補習等を行っているわけですが、そうしたなかなか身につかない子どもに対して、学校、そしてまた、家庭、地域との連携のところが大きいのかなという気がいたします。塾とかに行けないという子もいるのですけれども、塾に行っても、何のためにやっているのかというのをしっかり身



につけさせることによって、伸びていく度合いが大きいのではないかなと思っています。

○近藤区長

ありがとうございます。今、特に男の子を中心に、夢や希望を持っていない子が多いのではないかというお話でしたけれども、それは過去と比べて、現在、確実に持っている子が少なくなっているという実感を先生は持っていらっしゃるのですか。

○網田会長

これは男女と言ったのがまずかったのかもしれませんが、時代的にどうなのかというデータはありませんが、やはり小学校、中学校でも、そうした男女の違いというのは感じるのです。つまり、現実的にこういうことをやっていかなければという生徒は、中学校も多いのではないかと聞いております。時代的なことについてはわかりません。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、小学校PTA連合会の鈴木会長、お願いいたします。

○鈴木会長

学校、家庭、地域との連携を一層強めるということで掲げられておりますけれども、家庭の部分、私たちPTAというのは、かなり重要な働きだと思います。ほかの会議でもお話しさせていただいたと思いますが、貧困の連鎖を断ち切るためには、子どもたちに勉強させていただく平等のスタートラインをつくっていただいても、やはり私たち保護者がそれに対して同じ方向に向かっていかないといけないのかなと思います。

また、今日たまたま職場体験をしているところに2カ所行きました。中学2年生の子が多分やられているのかと思うのですけれども、できれば小学生でも、実際に仕事をしている場を子どもたちが見ることに對して、興味を持っていただければと思います。

子どもたちなのですから、今の青年ぐらいの方たちだと思うのですが、その場その場、臨機応変という応用力をなかなか生かせない方たちが多いように感じます。地域、学校、また家庭が本当に大事なのですけれども、そういうところを深めていって、そういう大人、人材をつくっていったらなと思っています。

○近藤区長

ありがとうございます。今、小学生の職場体験のリクエストや、家庭が大事というお話もございましたけれども、そういうことも含めて、何かほかに区として取り組んでもらいたい、ここがまだ足りない、欠けているのでというようなことはございますでしょうか。

○鈴木会長

子どもだけではなく、親子一緒にできる機会があったらなと思うのです。子どもの頑張っている、また楽しんでいる姿を見て、親も成長するのかなと強く思っているので、親子で共同してできるようなことを企画していただけたらと思います。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、中学校長会の保坂会長、お願いいたします。

○保坂会長

中学校のほうですけれども、子どもたちの様子を見ていて、家庭環境のばらつきといいましょうか、不十分さといいましょうか、その差がどうしてもあります。その場面を見ると、学習する機会が十分保障されていないなというのを実感することはあります。家庭の支援はまた別の問題かもしれませんが、学校でできることという、学校教育の量や質とかに手を加えることではないのかなということを模索しながら、ここ数年間やってきたところです。具体的には、もちろん基礎学力の問題があります。ただ、中学生はみんな高校に行きたいという夢を基本的に持っています。その後はどうするのかと聞くと、はっきり夢を持っている子もいれば、まずは高校へ行ってから考えようと思っている子もいます。したがって、中学生にとって、高等学校というのは、ある意味で憧れのところ。ただ、そこで中途退学という問題が出てきています。ですから、中学校としては、入るだけじゃなくて、高等学校の学習に耐えられるだけの基礎学力といいますか、そこまでやはり面倒を見なければいけないのだろうなということを実感しています。

そのことに関連して言うと、中学校1年生と3年生では、我々の構えも少し変わってきて、中1の子については、小学校との連携という視点で基礎学力の接続を図っていくというのが大きな問題ですけれども、中3の子にとってみると、高等学校との連携というのは、やはりとても大きい問題だと思えます。中高の連携と言いますけれども、それは、子どもたちが高校を通して、将来あるいは自立、職業といったものを夢見ているところがあります。そして、中学生が高等学校へ行くために、体験して、あるいは高校の話聞いて、実感しながら、さらに学習意欲を高めたりということによって変わってくる姿をたくさん見えています。したがって、子どもたちがたくましく生きていくために、そして、しっかりした仕事につくためには、中学校としては、小中の連携も大事ですし、その一方で中高の連携に視点を当てていくことも大事なかなという認識を持っています。

○近藤区長

どうもありがとうございました。高校の先生からも連携のお話が出ましたので、どの場面に、どういうコメントで書き入れるかは別といたしましても、足立区の教育大綱の中には、小中高の一層の連携を図っていくということは入れ込む必要があるのではないかと、個人的にですけれども、感じさせていただきました。ありがとうございました。

それでは、中学校PTA連合会の井門会長、お願いいたします。

○井門会長

今まで皆さんのいろいろなお話の中で、やはり中学校PTAといいますと、家庭、学校、地域となると、家庭が一番大きく、その保護者の代表ということでPTAをやっております。その中で、学びということに関して、1つは、学力もそうなのですが、子どもたちが生きていく中で、人との

接し方。子どもたちが人の痛みをわかって、人に優しく接するという心をつくってあげれば、今の世の中の非常に悲しい出来事がなくなってくるのではないかなと思っております。それには、やはり家庭、親がしっかりと子どもを教育するということで、うちのほうのある小学校ですと、挨拶運動というのがあるのですが、子どもがしないというよりも、結局親がしないから子どもがしないのではないかなということで、親に対しての挨拶運動もやっているのです。いろいろな意味で、親が子どもに対して親としての毅然とした態度をとることによって、子どもがある程度しっかり育っていくのではないかと。私たちが見ていく中では、やはり親が甘いのかなと。先日も言ったのですけれども、よく今スマホとかを子どもが夜遅くまでやっているということで、親として取り上げろと。もしくは中をちゃんと見て、今置かれている状況とかも考えて、そういった形でやっていいのだよということを親に言うと、本当にいいのですかと言うから、当然、親が全部払っているのだから、親の権利として、きちんとそういう形でやることによって、子どもが違う方向に行くのをある程度阻止できるのではないかなと思っております。ですから、家庭、学校、地域といろいろやっていく中で、学力もそうですが、やはり子どもの心を豊かに育て上げることが一番大きなことかなと思っております。

それと、将来に希望を持っているということで、何をやりたいかということなのですが、私ごとですが、子どもが2人いて、上の子は、将来の夢を持って、中学校は当然地元の中学校に行って、高校、大学と選んで、今、大学1年で入っているのですが、同じ子どもでも、下の子は、特にまだ将来何になりたいかという希望はなく、今、中3で、来年高校受験ということで、とりあえずどこか入れればいいかなみたいな感覚なので、先ほど保坂校長先生が言ったように、ただ漠然と入っちゃうと、入ってからつまずいて退学、やめてしまうという形があるので、そういったことの道しるべなんかも、親がきちんともう1回話してやっていきながら、先を示せばいいなと思っています。

#### ○近藤区長

ありがとうございます。ただ、しっかり厳しくやっていただけのご家庭は結構なのですが、保坂校長先生がおっしゃっていたように、家庭の環境にかなりの差が、それぞればらつきがあるということで、私たちが危機感を持っているのは、なかなか家庭で思ったようなケアがやれない、ネグレクトまでいかなくても居場所がないですとか、それが徘徊につながったりなどを考えますと、まず、家庭が厳しいところに対して、私たちがどのように関われるかということが1つと、今まで放課後の居場所づくりというと、どうしても小学校が中心に言われてきましたが、さまざまな昨今の事件等を考えますと、中学生こそ放課後の居場所等を真剣に考えていかなきゃならないのかなと私なんかは個人的に最近考えるのです。そうしたことの必要性みたいなことは、中学校のPTAですとか、また保坂先生にも伺いますけれども、中学校の先生方の中で議論されるようなことはあるのでしょうか。必要性についての認識はいかがでしょうか。

#### ○保坂会長

今までですと、中学校の場合には部活動がありましたし、子どもたちの大多数は部活動に入って

いたから、学校に5時、6時ぐらいまでいてということで、学校の授業とは切り離れたところで充実感を味わうということがありました。だから、あまり居場所づくりというのは意識しなかった部分はあると思います。ただ、今は、そういう意味では、部活動にも入っていない、かといって、帰って何かしているわけでもない、家の中でただゲームをやったりとかというような子もたくさんいるという状況になってきています。学校でも意図的に補習とかで個別指導とかをやっていますけれども、結構思ったより子どもたちは残るのです。残って勉強するよと声をかけると、本当にやりたいかどうかはわかりませんが、でも、そういった機会をつくってあげると、宿題をやったり、勉強をやったりということで残っている子もいるので、小学生だけでなく、中学校でも意識的に進めていくと、その可能性は広がるのかと思います。

○近藤区長

ありがとうございました。

井門会長、何かあれば。

○井門会長

今、保坂校長が言ったように、小学校ですと放課後子ども教室というのがあって、それをやっているのですが、中学校は基本的には部活動があるので、部活動をやらない子等に、例えば道徳の時間なんかで、やりたいことをいろいろ書いてもらって、その中で放課後の使い方とかを示していければ、また違うのではないかなと思います。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、野辺会長、お願いいたします。

○野辺会長

この大綱の案を見せていただいたときに、このとおりの施策をして、子どもたちがこのように育ったら、本当にすばらしい完璧な人間になるのではないかと思います。

少連協というのは、足立区には子ども会が約200ありますが、その200の子ども会の育成者といえますか、保護者といえますか、その方たちの集まりの会なのですが、直接子どもと話をしたりする機会は少ない、大人の会なのです。私は、役目柄、子どもたちと接することが大変多いのですが、ここに書かれているように、さまざまな経験を重ねたり、コミュニケーション能力を育てたりというのは、とっくの昔からやっていることなのです。なぜこれが浸透していかないかというのは、先ほどから皆さんがおっしゃっているように、親だと思います。割合に多くの親が行動にしる、考えにしる、自己中心で、例えばサッカークラブにしても、野球クラブにしても、子ども会にしても、自分が役員をやらなければならない会には子どもを行かせないとはっきり言われます。子ども会に入るために、ちょっと行事に参加してみませんかとお招きして、親子で来てもらいますと、子どもたちは大変喜んでいて、親も喜んで、結構熱心においでになるのです。それで、役員さんになっていただけないかと言うと、「それじゃやめます」と、子どもを引き連れてやめてしまう。そういう現

実を本当にいろいろなところで見聞きするのです。

ということは、子どもが一生懸命入ろうと思っても、親がだめと言えば入れないわけです。親が大人にならないうちに子どもを産んで、親になってしまう。そうすると、十分な教育ができないから、自分が遊びたければ、子どもをほったらかして遊びに行く、それから、子どもが入りたいと言っても、面倒くさいからだめ。そういうことで、どんどん悪循環が繰り返されていてというのが現状なのです。子どもに対して親が虐待をしたり、ネグレクトをするということも、やはり大人になっていない親だからだと私は思います。ということは、この理念を進めていくためには、子どもというのはこういうもので、こういうふうにしていかなければ親ではないというところをしっかりと再教育していかなければならないと思うのです。

子どもができた時点で、母子手帳をもらった時点で親も教育を受けないといけないという制度にして、3カ月健診とか、6カ月とか1年とかの健診のたびに、子どもとともに親が教育を受けていたら、幾らかは変わってくるのではないかというお話を聞きました。皆さんの話を聞いていると、家庭というか、特に親が問題だということはずっと前から感じているところなのです。

少連協では、区の委託事業として、キャンプですとか、ジュニアリーダーの研修をやっておりますが、そこに来ている子ども、それから高校生、中学生は本当に生き生きとしているのです。将来に対してどのような希望を持っているかまでは聞いていませんけれども、自己を肯定する力というのがすごくあると思います。子どもたちがジュニアリーダーの研修を受けたり、さまざまな体験を重ねていくうちに、だんだん心が育っていったのではないかと思います。

1つ提案があります。個人的な話ですけれども、夫が保護司をやっているとして、いろいろな子どもが来ます。そこで、あなたは子どものころ、子ども会へ入っていましたかという質問をしてほしいと言っているのです。夫には聞いてもらっていないのですけれども、子ども会へ入っていると非行に進む確率が少ないのではないかと私はずっと思っているのです。そういった調査をしていただけたらいいかなと思っています。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、赤間会長、お願いします。

○赤間会長

ただいまお話を伺って、まさにそのとおりではないかと思います。特に今、野辺会長がおっしゃいましたように、子どもたちはまず親が教育しなきゃいけない。地域に出てくる子どもたちというのは、まことにいい子どもたちばかりなのです。地区対は25団体ありますけれども、1年間を通しての事業の中で、必ず小学校、中学校を巻き込んだ事業を1つ2つやっているはずで、そこに出てくる子どもたちはまことにいい子なのです。おいと言うと、3つぐらい先を読んでやってくれる。これを頼むよと頼むと、5つ先を読んでやってくれる。こういういい子どもたちなのです。

ところが、最近の例を見ますと、どこでどんな事故があったよ、どこでどんな犯罪が起きたよと。

これはまさに親御さんなのです。なぜか。よく私は、地域で話をするのですけれども、あの子どもは、親を変えるにはどうしたらいいのだろうと。我々が、お母さん、お父さん、そこへ行って、あなたの子どもはこんなことをやっているのだけれども、もう少ししっかり教育してよ、教えてよ、生活態度を改めさせてやってよ、そんなことを私どもが言えるかどうか。何の冠もない私たちが、地域のおじさんだ、お婆さんだと言われて、その気になって、そういう子どもたちに直接折衝する、何をされるかわからない、こんな危険も今現在は含まれていると思います。

では、我々は何をしたらいいかということです。希望のない子に希望を持たせるのが地域であるかなと考えたときに、小学校、中学校、高校も含めまして、学校との連携は今でもやっております。学校を含めて、子どもさんはこういうことがあるからお願いしますよとお願いしに回ります。しかし、それだけでは足りないのかなと。では、我々が、ちょっと注意したいなという子どもに対して、どういうことをやったら、どうしたら親御さんに会えるのか、そんなことをちょっと考えていただければ、もう少し地域のおじさん、お婆さんも中に踏み込んで、いい子じゃなくて、悪くなりかけた子どもたちを救うことができるのかなと。

図らずも、今、野辺会長がおっしゃいました、ご主人が保護司をやっている。私も20数年、保護司をやってまして、大体私のもとに来るのは15歳から17歳。成人の場合は別問題です。大体15歳からということは、中学3年、高校1年から高校2年、その辺の年齢の子がものすごく多い。その子たちの話を聞くと、あるいは見ると、調書を読むと、必ず親御さんが何かで仕事に出ている、この事実には曲げられないのです。当然、子どものことですから、家にいません。そうすると、万引きはしかり、傷害事故はしかり、そういうことで警察のお世話になる。1年でも2年でも入って、さあいざ保護司さんの前に来る。おまえ、何をやったのだ、こんなことをやっていいと思っているのか。いや、絶対今度はやりません。やりません、やりませんで、1年でも2年でも保護司のところへ来る。では、保護観察が解除になりましたと。あいつ、またやったよという声が聞こえてくる。そうなる前に、誰が何をしたらいいのかということを教えてください。そういう感じを受けます。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、医師会の奥田先生、お願いいたします。

#### ○奥田理事

医師会としては、いろいろな取り組みもしておりますが、私の個人的なことも含めて、子どもたちに関する仕事で私も直接関わっているのが、学校医部、それから休日診療、あと、衛生部がしておりますこどものぜん息水泳教室等、子どもたちの健康等に関わる事業をいろいろやっております。また、特定健診もそうです。今現在話題になっています地域包括ケアは高齢化に関することではございますが、まず、これから社会を担ってってくれる子どもたちをしっかりと育てていかないと、地域包括ケアも多分成り立っていかないだろうと思うので、小児科領域を中心に、子どもたちの医療に関する取り組みをいろいろ進めています。

以前、近くの中学校で、朝礼で子どもたちにメッセージを言ってくれませんかと頼まれたことがあります。ものの5分しかないものですから、さあ中学生に何を言おうかなと私は思ったのですが、私はふだん0歳から100歳までの方を診察しておりますので、子どもたちには、とにかく諦めないでくじけないこと。

それから、ご存じのように、異常気象かどうかわかりませんが、いろいろな気象の変化があって、感染症の流行状況が昔とかなり違ってきています。例えばマイコプラズマは、以前は、4年に1回、オリンピックの年にはやると言われていました。今はもうしょっちゅうあるわけです。今年は、人食いバクテリアと呼ばれていますが、劇症型溶連菌も非常にはやっています。あれは筋肉が非常に挫滅されたりして、命に関わる病気でございます。その他、SARS、インフルエンザ、いろいろございますが、まずは体力をつけないと、やりたいことも多分できないでしょう、そのためにはどうしたらいいのですかと。一番お金がかからないシンプルな生活指導です。小児科はやっぱり生活指導が非常に大事です。水分をとること、保温、夏の暑さに対すること、もちろん食育、食べ物。今日は歯科医師会の会長がお越しになっておられますが、歯の衛生と食育は非常に大事で、そういうことを生活指導で一生懸命説明します。

また、小学生ぐらいまでは大体親御さんと一緒においでになりますので、2人に説明しなきゃいけないです。赤ちゃん、小さい子はもちろん母親もしくは保護者に説明をしないとイケませんので、なかなかそれは時間のかかる、手のかかるお仕事になってきます。大人の方は、ある程度、薬はこれとこれということで対応が可能ですが、お子さんは使える薬も限りがありますし、そういうところは体力がついているかな、正常に発達しているかな、精神的にはどうかとか、いろいろなところを我々のほうでチェックしながら、あとはこれでいくしかないなというところでやっていくわけですが、その辺が非常に重要になってくるかと思います。

子どもたちは、私自身もボランティア等で関わりながら、医師会の仕事もしながら、いろいろやってまいりましたが、くじけないで、振り返りながら、一生懸命考えれば、何か答えは出てくると思うのです。能力の高い子どもさんも、そうではないお子さんもいらっしゃるかもしれませんが、一生懸命考えていけば、何らかの答えは出ると思います。自分の考えをうまく表現することが大事ですが、あとは、人の考えをきちっと聞けるような子どもさんになっていただきたい。人の考えをちゃんと聞いて、それを自分に生かす方向です。それはやっぱり考えなければいけないと思います。

我々医者は説明義務というのがございますから、つつい我々ばかりしゃべることがよくあるのですが、そこで逆にトラブルになるので、人の話を聞くという傾聴を重要視すべきだろうと最近よく言われます。私も自分自身、反省しながら、日々振り返って、人の話を、患者さんの話をちゃんと聞こうと。その上で、こういう会議がありましたら、終わった後に、あれはどうだったのかと必ず振り返るようにしています。そういうことも、簡単なことですが、簡単なことから取り組んで、子どもたちも保護者の方も前向きに考えていただければ非常にうれしいなと思っています。

ちなみに、個人的には、私は4人の子どもたちが足立区の公立学校でお世話になっています。で

きる子どもできない子どもいたのですが、とにかく頑張ってやりなさい、諦めたらいかんということで、それは私の仕事場に受診に来る子どもたちにも言います。私のところも、不登校になった子とか、いろいろな子が来ます。とにかく一生懸命応援してあげます。ぱっと見て、かわいそうだなと思うことはよくあるのですが、ここで負けちゃだめだから頑張っていきましょうねと。ただ、あまりお尻ばかりひっぱたくと、かえってそれがプレッシャーになって、だめになる子もいるようなのです。だから、その辺の加減がいつも難しいなと思いながら、温かく見守ってあげるようにしています。学校の先生方は当然ご存じでしょうけれども、複雑な家族関係のお子さんが我々のところにも来ます。そういうお子さんたちも立派な大人に何とかしてあげないといけないと支援をしております。

個人的な気持ちも含めて、以上でございます。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、湊先生、お願いいたします。

#### ○湊会長

この教育大綱の意見を聞く場に参加させていただきまして、ありがとうございます。歯科は直接教育には関係ないかもしれませんが、医師会の先生方もそうですが、お口と体の健康をサポートする側面から教育に関わっているのではないかなと思います。

先ほど竹原校長先生がおっしゃったように、3割のどこへ行っていないかわからないという子どもの口の中をちょっと見てみてください。多分お口の中の管理がなされていないと思うのです。

私も年に数回、大学に講義に行くことがあるのですが、大学生でも生活習慣ができていないのではないかというような、授業中、平気でガムをかむとか、90分の授業に耐えられなくて、途中で退席する学生さんがいる。ゆとり教育を受けた子どもたちの学年ぐらいから結構出てきております。それはもう大人になってからですけども。

きのう、折しも、あだちっ子・いい歯推進園表彰事業という審査会に出席してきました。これは衛生部と教育委員会が主体となって、いかに歯を大切にするかということを保育園、幼稚園に働きかけ、そして、それを評価する会なのですが、その中で、園児とか親に対して積極的に取り組んでいる保育園や幼稚園の子どもたちの何人かは、あるいは多くは、家庭でのしつけの教育がしっかり形成されていて、小学校受験を目指している子どもが多いそうです。口腔管理ができている子はそういう感じです。

小学校までは、お口の健康というのは、あくまでも親が管理しなければいけないと思います。足立区のうしょく（＝虫歯になること）罹患率は、残念ながら、23区最低か、それに近い状態でございます。区長と歯科医師会、学校医師会がこれから頑張って、その汚名を返上しようと一生懸命取り組んでいるところではございますが、小学生のうちは親の管理です。やってほしいのは、中学校になったときに、部活とか定期試験があって、ぐだぐだに疲れて帰ってきて、小学校のうちは、親が磨きなさいと言って、磨いていたのが、中学校になると、それができていない。生活習慣の自己管理が



できていない。だから、中学生になるまでに、何とか自己管理ができるような環境に持っていったきたいのです。中高になると、多分健康になるので、1回我々歯科からも医者からも離れると思うのです。それで、高校を卒業する。これから大学へ行く、あるいは就職するというときに、1回戻ってくるのです。そのときに自己管理ができている子はいいい口腔清掃状態ができている。できていない子は、何でおまえはこんなになるまでほっておくのだよという、本当に二極に分かれるのが現状です。そこまで自己管理ができる子どもは、多分授業中にもしっかり聞いていて、勉強を一生懸命できる子だと思います。

小学校の校医もやっていまして、今の担当するところは結構しっかりしていますが、その前にやっていた小学校は、授業中平気で歩き回る子が二人、三人はいました。今行っている小学校は、最初はやっぱりちょっと落ちつきがないかと、5年ぐらい前は感じましたが、ここ一、二年、すごく落ちつきを取り戻して、いい感じの授業をやっている。あるいは、私がブラッシング指導に行ったり、口腔指導をするのですけれども、最近は結構落ちついて聞いてくれる子どもたちが増えた印象を持っております。

そんな感じで、歯科医師会として、側面から健康を管理し、健康が管理できれば、自己管理もできる子どもたちができてくるのではないかなと思っております。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。歯の件で言えば、ご承知のとおり、中学校卒業まで治療にはお金がかからないわけですが、お金がかかる、かからないに関係なく、虫歯で子どもが苦しんでいても歯医者さんに連れていかない親御さんがいるという実態は、小学校の現場からも私どもは受けとめております。ですから、今の医療体系の中では、例えば車で小学校まで先生方に来ていただいて診療していただくということは法的にちょっと不可能だということも出ておりましたので、実際にもし苦しんでいるお子さんがいたら、第三者が歯科医へお子さんを連れていく。そこまで関わっていかないと、虫歯に苦しむ子どもが減らないというお話も実際は出ているわけで、先ほど来、野辺会長、赤間会長からお話があったとおり、実際にそういう親御さんがいる。確かに親御さんの再教育も重要なのですが、再教育をする間に苦しんでいる子どもがいるという実態もあるわけで、この辺が一番足立区の厳しい現実かなと思うわけです。

お待たせしました。最後に、NPO法人の河野常務理事からお願いいたします。

#### ○河野常務理事

よろしくお願いいたします。青少年自立援助センターよりは、若者サポートステーション、あるいはセーフティネットあだちのほうが、こちらでは通りがいいかなと思います。10年ほど前から足立区さんとの関わりを持たせていただいていたいて、その当時、若者支援というので支援に入るときに、区の方々が集まる機会をつくっていただきまして、やっぱり地域によって課題というのは変わってくるので、何が一番足立区で問題ですかといったときに、1つは生活保護、あとは貧困の問題というのが大きい。では、我々として、サポートステーションを実施していきながら、若者支援をやって

いく中で何ができるのだろうというところで、生活保護家庭の若者たちへの訪問支援。先ほど竹原校長が、情報提供が必要だということをおっしゃっていましたが、その部分に対応していつて、2世代、あるいは3世代にわたって生活保護を受けている負の連鎖をそこで断ち切っていくと。恐らく10年ほど前からなので、足立はそういう取り組みでは元祖的だったと思うのですけれども、それを続けさせていただいております。

そういう流れもあって、もう1つ、一昨年より足立区内で実施させてもらっているのが、東京都教育庁のモデル事業で、竹原校長の学校にもお世話になっているのですけれども、高校中退対策で、未然防止の部分と中退後の支援。まだ中退後の支援までなかなか届いていないところはあるのですけれども、そちらのほうに対応していつていても、困窮の問題はかなり大きく響いてきているなどというのが実感としてあります。

1つは、この中に生きる力というのが出てきていますけれども、生きる力の部分は、年齢では成長していかないと思うので、その部分というのが育ち切っていない。例えば定時制で、本当はアルバイトとかができると、生活リズムが整って、逆に遅刻とか欠席がなくなる。だけれども、アルバイトになかなかたどり着けない、その基礎的な力ができていない。そういうところの就労準備支援的なことを、難しいことじゃなくてもいいと思うのです。コンビニでアルバイトをするための練習であったり、ファミレスでウェーターさん、ウェートレスさんをできるようにするためのトレーニングであったり、そういう基礎的なものを固めて入れると、ある部分、有効なのかなと思います。

私たちの本業のほうで言うと、ひきこもりとか不登校の支援なのですが、孤立していつているお子さんたちの問題というのは、やっぱり情報不足、経験不足、あともう1つは親子の依存関係の問題があります。そういうご家庭は親子間でも話し合いができない、情報も入ってこないというところで、家庭訪問というようなサービスを始めていきましたけれども、孤立が長期化すればするほど、社会に出ようとする場面というのは弱まってしまいますし、閉鎖的な環境なので、何をどうやったら次につながっていくかというのが、全く想像がつかない状態。親御さんもそういうところがあると思います。特に生活保護家庭のある一部分になると、そういう意識が弱かったり、そんな状態をずっと容認してしまう。下手をすれば、働いたら負けだというような教育をしてしまうようなところが親御さんでもあったりする状況なので、例えば中退して、ある一定期間、次の選択ができないままこもってしまったような方たちは、高校中退の調査とかを見ていると、次につながったのが医療機関というのが一番多いです。ハローワークとか、サポートステーションとか、職業訓練校とか、そういったものは本当に低い数字です。私たち、サポートステーションをやっていて、悲しくなるくらいの数値で、何でもかという、親子ともども、そういう情報を知らないのです。当然ですけれども、高校を卒業して、そのまま就職するのか大学に行くのかというところで、そこをそれてしまったときの進路選択のあり方みたいなのは基本教えてくれないので、最終的に孤立が長期化していくと、思考も狭くなってきて、周りもどこかおかしいのではないのかなというので医療機関につながっていつてしまうような。本当はそここのところにいろいろな選択肢を想像できるような状

態に持っていくことが重要かなと思っています。

自分の生き方とか、今後どうしていったらいいのだろうというのは、自分の活動エリアが狭いような若者たちで言うと、周辺でモデルになる大人とか、モデルになるような生き方みたいなものが具体的に見える機会、あるいは体験できる場が必要になるかなと。何かに参加していったときには、いろいろな人の価値観に触れる機会が多くなってくるので、そういうものを体験することで、自分の家は普通だと思っているのが、案外普通じゃないのだなというのがそこで改めて感じられるようになってくる。その上で、うちのセーフティネットあだちがやっているフリースペースわかばがあるのですけれども、ちょっとボランティア的に2泊3日の一応お勉強合宿という名目で、うちの本部の寮が西のほうの福生市にあるので、そこに週末とかにスタッフと一緒に寝泊まりしながら行うのですが、実際、50%ぐらいは遊びの要素を取り入れています。来た子どもは、朝起きてきて、食堂に行ったら、ぼそっと、ここは朝からご飯が食べられるのですねみたいな、そういうのが全然当たり前じゃない、嬉しかったり、びっくりしたりというようなところで、ある女の子は、うちの理事長が、朝みんなでお茶を飲みに行こうかと、試しに、ケーキを好きなだけ食べていいよと、朝御飯を食べた後だったのですけれども、10個ぐらい軽く食べてしまって、さすがにそれ以上食べたらとブレーキをかけつつ。でも、そういうところで、いろいろな環境であったり、人であったり、食の問題も大きいと思います。おいしいものをまた食べたいと思ったときに、どういうふうにつながっていくのか。やっぱりそういう欲も持っていてももらわないと、踏ん張って働いていこうとか、そういうところにも結びついていかないのかなと思います。

そういう部分で言うと、私たちがやっている支援というのは、先ほど竹原校長がおっしゃっていた、なかなか先のことが考えられない30%の中のまた一部分になってくるとは思うのですけれども、そういう細かいところも、個別のタイプに合わせた支援というのが1つ重要な部分になってくるかなと感じております。

ちょっとざっくりになったのですけれども、以上です。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。

河野先生、確認ですが、アルバイトにもたどり着けない、コンビニで働くための準備がというお話でしたけれども、その準備というのは、つまり、コミュニケーション能力ですとか、あとは学力の問題ということでよろしいですか。

#### ○河野常務理事

学力の問題もあると思います。計算ができない、おつりが出せなかったりという問題もあると思いますし、そもそも面接自体が難しかったり、履歴書を書けなかったりもします、そこにはもしかしたら発達障がいとか、そういう問題も絡んでくるとは思うのですけれども、仮にそういう層がいるのであれば、そういうトレーニングをやっていく中で、ご本人の生きづらさというのが浮かび上がってきて、そういうタイプを持っているのであれば、どのくらい生きる力を広げられるのか、あ

とは職とのマッチングというのも重要になってくるかなと思うので、そういう部分の早期発見にも有効になってくるかなと思います。

○近藤区長

つまり、学校に行かないのだったらアルバイトぐらいしろよというのは、そう簡単なものではないということですよ。アルバイトをするにもハードルがある子どもたちが大勢いるということですね。

○河野常務理事

そうです。学校に行くのでもまたハードルがあったり、目的意識が持てなかったりというところがあると思います。

○近藤区長

ありがとうございました。代表の団体の皆様には、とりあえず一言ずつコメントをいただきました。

それでは、これまでの骨子の立案に関わっていただいた教育委員の先生をはじめ、また、今日参加しておりますそれぞれの所管の職員からも、今のご発言に対してのご質問ですとか、確認ですとか、それも含めてご発言いただければと思います。

○竹原校長

すみません、もう一言だけ。

もう1つは、学校教育に足りないのは親学といったところ。就職とか、いろいろなことをやっていくのですけれども、親になったときにどういう役割を持つのだということ。

○近藤区長

子どもに対してですね。親に対する親学じゃなくて、子どもに対しての親学。

○竹原校長

子どもに対する親学です。大人になったときというのはよく教育するのですけれども、親になったらという教育はあまりしないです。ですから、親の役割ということをやっぱりしっかりやらなきゃいけないのかなと。

それから、私の娘が中学生のときには、おやじの会というのに入って、おやじ10訓というのをつくろうということで、1日一言声をかけようとか、いいところを褒めようとか、だめなものはだめと言おうとか。足立区の中の10訓みたいのがあって、それが各保護者に配られて、親の役割だよねといったことが出てきたりとか。それから、学校の中で、先ほど言いました親としての役割というところです。それから、区民の方々に本当にこれが全部浸透して理解していただかないと、高校生が3人公園にいますと、何も悪いことをしていないのに、悪者がいるという通報が来ます。すると、生徒は、何だよ、どうせということになってきて、そこから心が離れていくというのがありますので、そういったところも、いいんだよ、子どもたちはすばらしいものを持っているんだよという感覚の中で、足立区の子どもたちを、大人が悪いことだけ見ていくのではなく、いいところ探しもや

っていかなきゃいけないのかなとちょっと感じました。

○近藤区長

大変お忙しいところ、ありがとうございました。

それでは、小川正人先生、いかがですか。

○小川（正）委員

では、時間もないので、一、二点だけ、大綱の中身をより深めていくという立場で質問させていただきます。

1つは、小学校及び中学校の校長会にお尋ねしたいのですが、小学校で、本当にこの間、学校現場のいろいろな努力もありまして、基礎的な学力を中心にして、学力の向上についても非常に大きな成果を上げてきています。ただ、基礎基本の学力の一層の向上、定着とともに、学力プラス将来何を目指すのかという自分の目標に向かって、主体的に学習していく確かな学力を身につけさせていくということも、まだ足立区の小中学校においては今後の大きな課題だと思っています。

特に小学校にお尋ねしたいのですけれども、これまでの成果、つまり、基礎・基本を固めるということについては一定の成果を上げてきているのですが、次の学力向上の一手として何を考えているのかというのと、何が必要なのかということをお聞きたいと思っています。

それから、中学校の校長会にお聞きたいのは、いろいろな課題があるのですけれども、その中で、例えば先ほど江北高校の校長先生から中高連携が必要だという話がありましたが、中高連携といっても、かなり広範囲にいろいろな取り組み課題があるわけですが、特に足立区において中学校と高校の連携をこれから具体的に進めていくときに、具体的に当面取り組むべきことというのはどういうことが必要なのかということをお聞きたいと思っています。

中学校から高校への進路指導をより丁寧にしていくために、中学生の当面の課題というのは、社会に出てから、大学に行ってからということではなくて、当面は、あの高校に入りたい、あの高校に入ってこういうことを学びたいということが中学生にとっては最も身近で切実な問題ですので、そういうところを本当にしっかり目標を持てるような、中学から高校への進路指導のところで、子どもの学力とか、進路の希望に応じて、いろいろな高校体験とか、高校のいろいろな実習を経験するとか、そういうようなことを中心とした中高連携というイメージでいいのか、もっと違う課題があるのかというのを少しお聞かせいただければと思います。

○近藤区長

それでは、網田先生、会長というお立場で厳しければ、個人的なご発言で結構ですので。

○網田会長

個人的な発言ということをお聞きいただければと思いますが、これまで区の調査等を進めていく中で、通過率については上がってきている。学校現場で補習等を行っている20%の子たち、その実態はさまざまなのですけれども、そうした子たちにどう確実に力をつけていくのかというのは、やはりこれからも継続的にやっていかなきゃいけない中身だと感じています。加えて、もちろん都や

全国の学力調査等を見ている中で、いわゆるB問題、思考力等を含めたものについても、これからの取り組み。実際に、小学校では、五、六校で活用力向上ということでやっていますから、そうした実践を踏まえて広げていくということで、小学校においてはやっていく必要があるかと思っています。

もう1点は、ここの項目にもありますけれども、キャリア教育といったときに、進路指導ということじゃなくて、小学校の段階から、自分の生き方の教育だと思うのです。僕はこういうふうに生きていく。つまり、仕事だけじゃないと思うのです。将来、こんな仕事をやってみよう、もちろんそれもあるのですけれども、僕はこういう夢を持って取り組んでいく。先ほど私がお話ししたのは、なかなか夢がはっきり出てこない。それは発達段階の違いもあるのでしょうけれども、ただ、学校だけじゃなくて、家庭でも地域でも、先ほどお話もありましたけれども、私もそうだなと思うのは、地域の方のお話の中で、こういう苦労をしたけれども、こんなよさがあったよとか、そうしたお話を、コミュニケーションといったときに、子ども同士、子どもと教師、子どもと親といった中で、実際に子どもと親については足りない部分も多々あると思うのです。また、地域の方々とのコミュニケーションというのはすごく大事にしなきゃいけないと思いますし、そうした夢を持たせるという意味では、このキャリア教育と言われているものは、やはり学校だけじゃなくて、いろいろな機関等も踏まえて、先ほど体験という話もありましたけれども、行っていく必要があるのではないかなと思っています。

#### ○近藤区長

今、将来の夢を持たせるためのキャリア教育、生き方の教育という話があったわけですが、家庭環境が厳しいご家庭の子どもほど、将来の夢だとか希望が持ちづらいという実態はやはりあるのでしょうか。

#### ○網田会長

家庭の中で、例えば小学校3年生の子どもが、今日学校でこういう話があったのだけれどもと言ったときに、兄弟、あるいは親とそういうコミュニケーションを図れるかどうかというのがやっぱり大きいと思うのです。私が小さいころは、親も忙しかったのだけれども、隣のおじさんがいろいろ話をしてくれるとか、熊本の田舎ですけれども、そうした地域の人とのコミュニケーションのつながりが結構あったと思っています。ただ、今はなかなかそれが、先ほど野辺様のお話にあったように、親の考えで、そういう場には行かないとか、そういう状況にある中で、余計聞けないということもありますよね。そういう意味では、地域の方々へお願いしているのは、いろいろな経験とか、子どもたちが夢を持てるような経験談とかお話とかをしていただく場も大事ではないかなと思います。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、保坂校長先生、お願いいたします。

○保坂会長

中高連携の先ほどの例で言いますと、まさに進路指導の一環だと思っています。具体的には、高校の体験授業という形になりますけれども、自校の場合ですと、近くに足立西高校がありますので、たまたま近いという条件もあるのですけれども、西高の先生が私どもの中学校に来て、授業をしてくださる。そして、中学生が高等学校に行って授業を受けるというふうに、相互に交換しながら、高校の授業とか雰囲気とかというものをわかったりする。また、高校の先生も中学生の実態がわかるということで大変効果があると思っています。

それをなぜやるかということ、意識の高い子は、夏休みぐらいからもう既に高校見学に行っているのです。でも、行かない子は、中3の子でも、本当に最後まで高校を見に行かない、足を運ばない生徒がいるのも事実なのです。ですから、子どもたちに任せる部分はあるのですけれども、任せていたのでは、そこでも差が出てくるということであれば、学校単位でお互いに行事として、進路指導の一環としてやるというのが効果的かなと思ってやっていますので、まさにそれは進路指導の一環と考えています。

狙いは、あくまで子どもたちの内面性を高めるということにかかっていて、高校へ行きたいがために一生懸命勉強しようとする、それでもいいのです。とにかく中学3年になると、勉強がわからないですから諦めちゃうのです。諦めちゃう子をいかに諦めさせないかという動機づけというのは、学校の成績を上げるということよりも、高等学校に頑張れば行けるのだというのはすごく大きな動機づけになるので、それはとても強いものがある。だから、動機づけ、意欲づけという意味で、内面性を高めるためにやるという狙いでやっていると言えます。ただ、今言ったように、全部が全部できるわけじゃないので。例えば近ければ、中学生をそのまま引率して行って、授業を受けられますけれども、それはできませんので、高校の先生に来ていただくことは何とかできると思いますので、その点であれば、どの中学校でも可能かなと思っています。

○近藤区長

伺いますが、今のような、高校の先生が来てくださったり、中学校のほうが高校に行ったりするような連携を今実施しているのは、感覚的で結構ですが、大体全体の何割程度と考えていますか。

○保坂会長

数えるぐらいしかないのではないのでしょうか。

○定野教育長

少ないです。

○近藤区長

ありがとうございました。

○小川（正）委員

今の現状を踏まえて、さらにどう発展させるかという取り組みの方策については、教育委員会でも考える必要があるのかなと思っています。

○近藤区長

ありがとうございます。

では、花岡先生、いかがでしょうか。

○花岡委員

こういう場を設けていただいたことに本当に感謝したいと思います。

前から思っていたのですが、子どものためのということでいろいろな団体があるのですが、その横の連携があまり持たれていなかったような感じがします。教育委員会と各団体、小学校、中学校の校長会、また、P連とかという形ではありましたが、本格的に幾つかの団体が集まって意見交換をする——今日は聞く場という形ですけれども、相互に意見交換ができる場所はやっぱりつくっていくべきだし、今後も続けてほしいというのは実感としてあります。横の連携、斜めの連携が必要ということが言われていますが、これが実際の連携だろうと感じています。

今日勇気づけられたのは、家庭の、また、親の問題、責任を公に話をできる、していただくということが1つあったということです。自分も中学校の校長でしたので、親の責任ということは公にはあまり言えません。というのは、責任転嫁という形に捉えられてしまうことが多々あります。それから、それは逃げじゃないかと言われてしまうこともあります。しかし、最近は、コミュニケーションとか、家庭、学校、地域の連携というのが大事なのだということで、その辺のところはちょっと薄れてきたかもしれませんが、残っているのかなと。ほとんどの団体の方に聞くと、やっぱり家庭であり、親だと。そこに打ち込んできたのが、ここにも書かれていますが、貧困の連鎖を断ち切る教育、ここにきたところで、こういう話が公にできてきたのかなと思います。横、斜めの連携でくさびをどう打っていくか、また、支援をしていけるのかということが我々教育委員会としても大事なことだと思います。

というのは、よく言われることですが、家庭というのは生涯教育の原点で出発点だとか、親は人生最初の教師だとか、また、人は皆教師、こういう言葉がありますけれども、今の場所で我々団体等が頑張る、人のせいにしないで、みんなが教育者の1人なのだという自覚を持っていくならば、変わってくるだろうと。ということは、今日の大綱についてもそうですが、言うことは簡単だと思います。これをどう実行に移すのかということが大事なのかなと。どなたか言われていましたけれども、その辺のところを我々自身もこれから検討して探っていきたいし、また、実行に移していきたいという思いでいっぱいです。

○近藤区長

ありがとうございました。

それでは、桑原委員、保護者の代表者として教育委員会に関わっていただいているわけですが、よろしくお願いします。

○桑原委員

私は、今日の会議に参加させていただいて、印象に残ったキーワードが2つぐらいございます。



1つは、夢と希望を持てる社会というキーワードと、もう1つは、花岡先生がおっしゃったのですが、親の責任。野辺会長がおっしゃったのですが、親が自己中心的になっている、親の再教育が必要だということなのですが、今日は足立区の教育大綱の会ですので、今の幼い子どもたちを含めて、7万人近くの足立区の子どもたちみんなが、この大綱をもとにして、この子たちが大きくなったときに自己中心的じゃない大人になってくれればいいのかと思って、皆さんの発言をお聞きしていました。

中でも、小P連の鈴木会長がおっしゃっていた、小学生も職場体験ということがあったのですが、私は、小学生はもっといろいろな夢を持ってほしいので、宇宙飛行士だとか——今の小学生に聞くと、宇宙飛行士も入っているのでしょうけれども、男の子は特にスポーツ選手が多いのではないかなど。スポーツ選手の職場体験はなかなか難しいかなとか、宇宙飛行士の職場体験も、JAXAに行ったりする機会はあると思うのですが、行けない子たちはどうするのかとか、そういうことを思っていたりします。とにかく小学生には、現実の職場というよりも、もっといろいろな夢を疑似体験できるようなことが、行政とか教育委員会できないのかなと伺っていました。

それとあと、中学生ぐらいになると、将来何になりたいのかというのは、本当に身に迫ってくるものなのですが、今、世の中、どちらかというと、商店街が下降気味というか、シャッター通り商店街みたいなのが日本国中にあるのですけれども、お父さん、お母さんが働いている姿が見られるようなところは足立区にまだまだたくさんありますし、職人さんですとか、お父さん、お母さんが働いている姿が見られる町というのは残していきたいと思います。

それと、この間、テレビをちょっと見ていたときにやっていた番組なのですが、わざわざアメリカから15歳の子が日本に来て、燕三条駅でおりて、新潟県燕市にある職人さんのところに来たと。どうして来たのかなという話だったのですが、燕市はスプーンとか食器類が有名なのですが、その中に、刃物をつくる刀鍛冶かどうかはわからないのですが、ナイフとか包丁をつくる職人さんだったのですが、そこでちょっと体験してみたいと、わざわざアメリカから来たということで、日本の子どもたちももっと職人というか、そういうところにも夢を持ってもらいたいなど。会社勤めも大変ですが、みんないいなと思って、高校、大学に行って、大企業にということになりますが、違う道も、いろいろな道があるのだよということを教えていくのが大人なのかなと思って、今日の会議に参加させていただきました。そんなところです。

#### ○近藤区長

ありがとうございました。

#### ○保坂会長

将来のことを考えたときに、高校を出て、大学を出て、それで定職についてということをついつい考えがちで、自分自身がそうだったせいもあるのですが、でも、今や社会が、フリーターであるとか、これだけ生き方がさまざまになっている世の中で、きっと今の中学生や高校生は、我々が思い描いているような将来像とは違うものがあるのではないかなど。例えば高校を出て、国内で

二、三年働いて、お金をためて、そのお金を持って海外へ行って、そこでまた新しい体験をしながら、自分の漠とした夢がかなうのかどうかとか、自分に合っているのかどうかということを探す、自分探しになるのですけれども、そういうことをやりながら、また日本に帰ってきて仕事につくとか、そういうことでもあると思うのです。

だから、いずれ将来しっかり自立するわけですが、そこに至る道というのはたくさんあるのだということを前提に考えることもある意味で大事な点。そうすると、そこに至るまでに、その子どもがしっかり自分の考えを持って行動に移して、なおかつ、ルールやマナーを身につけてというところで生き抜いていく。まさに20代前半をそういった生き方をしながら、自分の仕事を見つけていくということもあると認識していかなないと、我々の世代の固定観念から、何でちゃんと仕事にもつかないでという言い方をしてしまうこともあるので、我々の考える幅を広げておいたほうがいいなという気持ちもあります。

○近藤区長

ありがとうございます。

○花岡委員

ひとつお聞きしたいのですが、先ほど出たと思うのですが、問題行動のある子だとか、不登校の児童・生徒、それから中途退学生徒等々、そういう生徒の情報を共有しなければいけないのですが、そこに1つの壁、個人情報というのがあるのではないかなと思うのです。その辺はどうなのか。各団体の方で、そういうことを感じた点があるならば、教えていただけますか。

○近藤区長

今、江北高校の校長先生がご退席になったので、例えば夏休み以降に中退されたお子さんの名前を出身の中学校に教えていただくことがプライバシーに触れるのか触れないのかというようなことも非常に微妙な問題だと聞いていますので、これは東京都のほうにも確認をさせていただきたいと思います。

さっき河野さんがおっしゃったように、必要なところに必要な情報が届いていない。孤立が長引けば長引くほど情報からも孤立してしまうのだというお話がございましたので、まさに1つ、中退後の支援としては、その辺のところをきちっとしていくことが必要だと思いますので、どのようにしたら、そういったプライバシーの壁が乗り越えられるのかということについても早急に調査したいと思っております。時代もどんどん変わっていますので、かつていいことでも、今は難しくなっていることもたくさんございます。

では、それぞれの意見を踏まえて、教育長、いかがでしょうか。

○定野教育長

今日いろいろなご提案等をいただいて、もちろん教育大綱に幾つか載せなきゃいけないものがあるなど。例えば、ちょっと気がつかなかったのですけれども、体力の話であるとか、あるいは基礎的な生活習慣の話であるとか、割とそういうのが整っているようなごときになっているかなという

ころをどうやって入れ込むかはまたちょっと考えますけれども、入れなきゃいけないかなということ。あと、夢とか将来、社会の問題は、親の問題、我々——うちの子どもはもう卒業しちゃっていますけれども、社会全体の問題は非常に大きな問題なので、それをどうやって書き込むのかなというのは、テーマとして大きいなということがあったのと、もう1つ、今度は逆に、ここに書き込むのではなくて、個別の幾つかのご指摘の中で、例えば中高連携の話は非常に現実的な話で、中学の情報が高校になかなか伝わっていない、そのために子どもたちが悩んだりしている、これをどうしようかという問題もありますし、さっき小川正人先生からあったように、もっと進路指導をきちっとやるために、高校の情報とかは中学に入ってこないというところを実際に今やっているところです。

さらに、象徴的だったのが、コンビニでアルバイトができないというのが、私はちょっと衝撃的な話だなと。逆に言うと、今いろいろな就業体験を中学なんかはやっているのですけれども、なかなか受けていただけないところがないのです。我々が探すのは、商店だとか、物をつくっているところとかはあるのですけれども、確かにコンビニというのは……。保坂先生、コンビニに子どもたちを出したという記憶はありますか。

○保坂会長

なくはないと思います。

○定野教育長

なくはないですか。でも、そのレベルがコンビニだということが非常にいいなと。コンビニは区内にたくさんあるので、そういったところと連携、提携してやれば、もっと開拓できるかなと。具体的にはそういうことも今思っているのです。それはなぜかという、数の問題と、あと水準の問題です。お客様とのやりとり、それから、お金の勘定ができて完結できる。あるいは店をきれいにしておくとか、いらっしゃいませと言えとか、そういったところが、私としては、具体的な話として非常におもしろかったなと思っております。

今日は非常に参考になりましたし、また、幾つかご紹介していませんけれども、教育大綱に盛り込むべきものがまだあるなと感じました。

○近藤区長

今、教育長から発言がありましたとおり、教育大綱に盛り込むべき、追加すべきものについては、今日のご発言を承って、精査してまいりたいと思います。

それと、この大綱をつくって終わりではなく、これを実現するに当たって、いわゆるアクションプログラムといいますか、行動計画のようなものを、今回きちっと教育のほうでつくっていかなければなりません。それに当たって、今日、具体的な事業に関わるようなご提案もいただいておりますので、例えば中高連携を具体化するためにはこうするべきだ、ああするべきだと、夢や希望を持たせるためにはこうするべきだ、ああするべきだということについては、行動計画のほうにきちっと盛り込ませていただくというように整理をさせていただきたいと思います。また、今日、承りだけでなく、どのような整理をするようになったのかということも、追って皆様方お1人お1人に文

書等を通じてご報告させていただきたいと思います。この件についてはよろしゅうございますか。  
——では、そのようにさせていただきます。

また、改めて何か文言でこれを入れてほしい、具体的な事業としてこういうことを追加してほしいというようなことがあれば、後々でも結構ですので、メールですとかファクス等でお寄せいただければと思います。

本当にありがとうございました。

○中村政策経営課長

では、これで、案件1の意見交換会を終了させていただきます。ありがとうございました。

○近藤区長

長時間にわたりまして、ありがとうございました。今後とも、またよろしく願いいたします。

## 2. 教科書採択結果について

○近藤区長

今回、教科書の採択の問題がございまして、教育委員会から、どのような観点で今回教科書を採択したかという件について報告を受けることになっております。

では、教育長から報告をさせていただきます。

○定野教育長

8月7日、教育委員会で教科書を採択させていただきました。選択の方針としては、生徒の発達段階に応じて、基礎的、基本的な内容がきちっと身につくことが配慮されているとか、単元の分量、系統性、あるいは課題を発見したり、課題を選択したり、その解決に向けていろいろとディスカッションしたり、そういったことが配慮されているか、このようなところを観点に選択をさせていただきました。

簡単にご紹介しますがけれども、国語では光村図書。読み深めるためにというところから、考えさせる活動が取り入れられている。

社会の地理は帝国書院を採択しましたがけれども、これは「ふりかえり」というようなページがあるということ。

歴史については、幾つかの教科書が議論になりました。最終的には日本文教出版を採択いたしましたけれども、東京書籍、学び舎、育鵬社などの教科書の議論があった上で、特に戦後の教育制度の改革でありますとか、あるいは単元の見開きが使いやすく整理されているとか、こういったところを中心に、日本文教出版が採択されました。

公民については日本文教出版ということで、これは地方自治の観点とか、あるいは先ほど申し上げましたけれども、「アクティビティ」と言って、生徒がいろいろな活動をこれを中心にできるという観点から採択をさせていただいています。

裏のページに行きまして、数学については東京書籍ということで、これは基礎・基本の定着につ

いて、繰り返し丁寧に取り組めることができるという観点から採択をさせていただいております。ここでは大日本図書というところも議論になりました。

理科については、啓林館と東京書籍ということで推薦がありましたけれども、最終的には東京書籍ということで、小から中への連携なども意識しているということと、それから、学習の流れが非常に丁寧に、レポートや発表の仕方などについてもわかりやすい記述がされているというところでした。

英語については、これまで三省堂を使っていたわけですが、光村図書ということで、これについては、身近な話題を3年間を通してずっと取り上げているということで、英語の教師の皆さんに言わせると、チャレンジングな採択ではなかったのかというご意見をいただいているところです。

この教科書を使って、来年度から子どもたちの教育に当たりたいと考えております。

以上です。ありがとうございました。

○近藤区長

よく議会のほうから、どのような観点を重要視して教科書を採択するのか、選択するのかというご質問が出るわけです。そのときに、先生が教えやすい教科書というような発言が出たときに、じゃ、先生の立場に立って教科書を選ぶのか、やはり子どもの立場に立つことが必要なのではないのかというようなご議論が出たことも私は記憶しているのですが、その点については、今回、どのような立場で選ばれたと考えていらっしゃいますでしょうか。

○定野教育長

先生が教えやすいというのではなくて、逆に、子どもたちが理解できるのか。今回、採択した教科書は、授業のときに使うだけではなくて、例えば家庭に持って帰っても、それを読んで理解ができる。実は家庭のお父さん、お母さんが読んでも非常に勉強になるストーリーが描かれているというところが非常に特徴的だったのではないかなと考えています。

○近藤区長

わかりました。卒業してしまうと、教科書を目にする機会もないので、一体今はどのような教科書でお子さんたちが学習しているかということですが、採択の前にはアトリウムで全ての教科書について展示があったわけですが、これが採択されたという決定の教科書については、そういったものはないわけでしょうか。

○定野教育長

既にホームページには掲載していて、8月31日は東京都にも報告してありますから、公開されています。それから、今回は、下のアトリウムだけでなく、こども支援センターげんき、あるいは芸術センターでも展示をさせていただいたということです。ただ、確かに展示会場にポスターとかそういうのは張っていないです。

○近藤区長

そうじゃなくて、選ぶ前は、対象となった全ての教科書を並べたわけです。決定された教科書について、これが足立の小学校、中学校の教科書に決定しましたということで、展示をして読んでいただく。いらっしゃるかどうかは別にして、それは必要じゃないでしょうか。

○定野教育長

いいですね。それはおもしろいです。

○浮津教育指導室長

げんきが教科書センターの機能も持っていますので、そこに新しいものは置かれます。

○近藤区長

ただ、げんきというのは、いらっしゃる方が限られますから、少しでも大勢の方に見ていただくと考えれば、アトリウムに置くのは当然のことだと思います。

○定野教育長

早速検討させていただいて、対処したいと思います。ありがとうございます。

### 3. 次回の予定

○中村政策経営課長

それでは、次回の予定を事務局からお話しさせていただきます。次回は9月24日木曜日、2時から4時の2時間でございますが、乳幼児期と成人期の各団体からの活動、それからご意見をいただく機会を設ける予定でございます。場所は8階の庁議室で実施させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、第4回足立区総合教育会議を終了させていただきます。本日は、お忙しい中、ありがとうございました。